

研究・調査報告書

報告書番号	担当
456	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
The effect of alcohol on atherosclerotic plaque composition and cardiovascular events in patients with arterial occlusive disease. 動脈閉塞性疾患患者において飲酒が動脈硬化性プラークや心血管病の発症におよぼす影響についての検討	
執筆者	
Gisbertz SS, Derksen WJ, de Kleijn DP, Vink A, Bots ML, de Vries JP, Moll FL, Pasterkamp G.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Vasc Surg. 2011 Jul;54(1):123-31.	
キーワード	
飲酒、内膜剥離術、心血管病発症、動脈硬化性プラーク、動脈閉塞性疾患	
要 旨	
目的： 大腿動脈もしくは頸動脈内膜剥離術を受けた患者を対象に、飲酒が心血管病の発症や動脈硬化性プラークの病型に及ぼす影響を検討した。飲酒は健常人と同様に心血管病患者においても心血管病の発症に予防的な効果があることが示されている。しかしながら、飲酒がプラークの性状に変化をもたらすか否かについては検討がなされていない。	
方法： 大腿動脈内膜剥離術を受けた患者 224 人と頸動脈内膜剥離術を受けた患者 693 人を対象に、コラーゲンや石灰化、平滑筋細胞、マクロファージ、脂肪、プラーク内血栓の有無について組織的に検討した。そして、3 年間、心血管病の発症を追跡した。エンドポイントは心血管病の発症とした。飲酒量は非飲酒、週当たり 1 から 10 単位未満、週当たり 10 単位以上に分類した。	
結果： 3 年間追跡の結果、心血管病発症のカプランマイヤー曲線の結果は、大腿動脈内膜剥離術を受けた患者では、非飲酒群は 35%であり、週当たり 1 から 10 単位未満の群は 21%、週当たり 10 単位以上の群では 10% であり、統計的に有意な差を認めた。また、飲酒群は非飲酒群と比較して、リッピドコアが小さく、マクロファージの侵入も少なかった。一方、頸動脈内膜剥離術を受けた患者では飲酒習慣の差により心血管病の発症やプラークの性状に差を認めなかった。	
結論： 大腿動脈内膜剥離術を受けた患者では飲酒は心血管病の発症と負の関連を認めた。また、プラークの性状の安定化との関連を認めた。一方で、頸動脈内膜剥離術を受けた患者ではそのような関連を認めなかった。	